

一般教育における「ドイツ文化専攻」 について ——研究ノート——

高 木 文 夫

0. 筆者は以前「一般教育としてのドイツ語教育」と題して、大学の一般教育においてドイツ語教育がどのようなものになるべきかを、大枠で述べたことがあります⁽¹⁾、ここではそこで取り上げた項目のひとつを、研究ノートの形で、敷衍してみようと思います。その前々稿で、筆者は次のように述べています。

「ドイツ語の授業は時間数が限られているうえに、かなり盛り沢山の内容を扱うことが必要なので、日本語のできる部分は他の科目や自習に任せるしかない。しかし、ドイツ〔語圏〕を扱う『総合的』な科目があれば、ドイツ語教育にとって有益であるし、他の『一般教育科目』との関連性もそこから生じる。」⁽²⁾

またこの小論に続く、小さな文章⁽³⁾でも筆者は前々稿を補足する形でドイツ語教師の持つべき「総合性」を述べています。残念ながら、上に言及した「ドイツ〔語圏〕を扱う『総合的』な科目」はまだ実現していませんが、ともかく、二つの小論を書くうちに、次に扱うべき課題として、「ドイツ語教育と『総合』」というテーマがあることが筆者にとって明らかになりました。本稿ではこのテーマにより、ドイツ語教育の立場から、大学の一般教育を改善する試みのひとつである「総合コース化」の構想へのアプローチを、その具体例として、従来の「専門教育での『専攻』」とは異なる、「一般教育における『専攻』」としての「ドイツ文化専攻」を構想してみようと思います。ドイツ語教育の周辺への広がりのひとつのあり方としての「総合コース」構想は、大学におけるドイツ語教育の改善に従来議論されてきたことに、さらに広い展望を与えてくれると思います。

なおこの構想は香川大学一般教育部に設置されている「カリキュラム検討専門委員会」で扱っているものであり、以下に述べることは一委員である筆者が

すでに同委員会の席上で、そのおおまかなことを報告したものであり、さらに1989年7月8日～9日に山口大学教養部で開かれた「第13回ドイツ語教授法ゼミナール」で筆者が行った報告⁽⁴⁾において一部紹介したものだということをお断りしておきます。

1. まず最初にドイツ語教育やその周辺の現状でこのテーマに関係することから述べてみましょう。香川大学では外国語の履修は所属学部により規定された履修基準で、英語の他に、あるいは英語を含めて一外国語を選択するという行われていますが、ドイツ語の他、フランス語、ロシア語、中国語の4外国語の中から、学生たちのドイツ語を選ぶ動機は、「ドイツに関心があるから」とか「専門の基礎としてドイツ語を習得したい」のような積極的なものから、「大学ではドイツ語を勉強するものだ」という伝統依存型、「親や先生がすすめてくれた」や「兄や姉が勉強したから」というもの、「4つの選択肢の中で消去法で最後に残ったのがドイツ語だから」、または「周囲のものがドイツ語の辞書をくれたから」というものまでさまざまです⁽⁶⁾。学生の動機は、積極的なものはごく限られていて、総じて消極的なものだと言えます。勿論このような消極性を学生側の責任に帰すことはできません。というのは外国語に関しては世間はほぼ英語一辺倒ですし、学生にアンケートやテストをしてすぐに明らかになることですが、ドイツ語やドイツについての知識が思いのほか学生にはありません。それはまた学生だけのことではないのかもしれませんが。一般的にはドイツ〔語圏〕について知る機会というのは、まずテレビ、雑誌、新聞あるいは観光パンフレットのようなものであって、そこで得られる知識は観光案内風の断片的知識やニュースで伝えられる政治や社会情勢のやはり断片的なものであり、まとまった、小規模であっても体系的なものとは言えません。学生の場合でも、入学して来る学生全員が高校で世界史を履修してくるとは限らないので、また世界史でもドイツの歴史だけが扱われているわけではないので、世界史を選択した学生でも必ずしもドイツが強く印象に残っているわけではありません。したがって、ドイツ語を選択したからと言っても、ドイツ語の授業を受けているうちにそのまま自然にドイツ〔語圏〕に関心が湧いてくるとは期待で

きません。そこにドイツ語の授業でどのような教材を使うか、どのように授業をすすめるかが重要になってきます。

次に学生の他の一般教育科目の履修のことを考えてみましょう。まず、筆者は現在隔年で「演習科目」の文学の授業を担当しています。筆者はドイツ文学を専攻していますから、当然のようにドイツ文学を授業で取り上げます。文学、特にいわゆる古典的な文学については現在一般的に関心が薄れているように思われます。学生も例外ではありません。ジャーナリズムで喧伝されている作家——このような作家がよく読まれるのはいつの時代でもあったことで、それをめくじらを立てて怒るのは筋違いというものですが——、映画化された作品こそよく読まれますが、それ以外の比較的地味な文学作品は細々と読まれている、少なくとも大学の中ではそのように見えます。この点も学生に責任はありません。受験の準備やクラブ活動に大半の時間をとられているし、本以外にも娯楽——本は楽しんで読むもので、強制されるものではありません——はたくさんあるし、古典的な文学についてはせいぜい国語の時間に国文学史で教えられるぐらいで、先生はどんな本を読んだらいいかあまり教えてくれません。先生だって本はあまり読む時間がとれるわけではありませんから。結局のところ学生側からすれば、古典的な文学についてはあまり情報が得られないし、図書館に本を読みに行くこともあまりないし、本屋にはあまりその手の本は置いてないし、あってもなんとなく手を延ばしにくく思えるし、いざ手にとってみると活字ばかりで読みにくそうだし、という状況なのです。ですから筆者の授業のように外国文学の翻訳であれば、予備知識が皆無に近く、ますますとつきにくいので、授業には何だかよく分からないけれど、単位が必要だし、この時間は空いてるし、他の同一時間帯の授業は受講学生がいっぱいで受講させてもらえなかったから、この授業に来たという学生が多くなります。別に受講に条件をつけているわけではありませんが、最近は何ぞドイツ語を受講してる学生が筆者の文学の授業に多くなりました。これは上のような理由で学生が「回って来た」からであって、偶然そうなっただけだと思われま

外国語科目や体育科目のように指定された授業以外の科目を学生はどのような基準で選択しているのでしょうか。ドイツ語の受講手続きで学生の出す履修

表をのぞき込むといろいろなことが分かります。香川大学では人文・社会・自然の3系列の授業は原則的に全学の学生に同等に開放されているので、かなりの選択幅があり、学生は自分の関心に応じて好きな授業をとれるはずです。ところが学生たちの話などいろいろな情報源を総合してみますと、多数の学生の選択基準にはその授業の単位の取りやすさが大きな比重を占めているようで、カリキュラム編成の最初の趣旨がじゅうぶんに活かしているとは言えません。学生を受講のしかたは核となるような主題に欠けているとしか言えないのです。これも入学したての学生にいきなり求めるのは多少酷かも知れません。というのは入学以前に自分の考えをしっかり持って入学後の学習計画を立てていたり、自分のテーマを持っていたりしているのは少数派だからです。これも上のドイツ語の選択や「演習科目」の受講での学生の判断の場合と同じことが言えます。

このようなことに到る原因としてはこれまでに述べて来たように一つには学生の動機不足というよりは知識不足であり、そこから動機も生まれて来ない、したがって、一般教育での——専門教育でも履修基準が無ければ、同じことが言えるかもしれません——履修科目に一定の主題や目的意識が生まれるとは思えません。

2. このような学生の履修の実態ではそれぞれの科目はそれぞれ独立して、というのは聞こえはよいのですが、要するにバラバラに受講されていて、一般教育のカリキュラム全体での科目間相互の関連性は認められません。せっかく、「総合科目」という授業改善をしておきながら、それがカリキュラム全体での統一性を生んでいないのです。したがって、このような状態ではそれぞれの科目が自己完結していて、他の科目への広がり生まれません。ドイツ語教育の場合をとってみても、ドイツ語の授業の枠内だけで、完結しなければならず、ただでさえ、時間数が足りないのに、ドイツ語という言語の背景まで授業に取り入れようとすれば、授業そのものが中途半端になる危険性があります。ドイツ語の授業を実際に行っていると、このような言語の背景について説明をすることが学生にとってどれだけ動機づけになるかはすぐに分かります。ことば

だけでなく、ドイツの歴史や実情を口頭で説明したり、ビデオなどで見せたりすると学生の目の輝きが違ってきます。したがって、冒頭で前々稿を引きながら述べたようにドイツ語の授業の外に、しかもドイツ語の授業と関連づけられて、このような背景を扱うような授業が存在すればと思うのです。かと言って、その新しい科目がドイツ語の授業に従属したものと捉えるのではなく、それはそれとして独立し、そして独自にさらに他の科目と関連性を持てばいいのです。

ではドイツ語の授業に関連することを例として、どのようなものが構想できるか考えてみることにしますが、まず、現在ドイツ〔文化〕関係でどれくらいの授業が香川大学の一般教育および専門教育で開講されているかを次の表1で見てください。

表1

年次	一般教育					専門教育			
	外国語	人文	社会	自然	保健体育	教育学部	法学部	経済学部	
1	ドイツ語Ⅰ	哲学A～ 哲学S 倫理学S 倫理学U	法学 経済学 社会学 行動科学 社会科学概論 社会科学概論S	環境科学 科学論	保健体育概論 体育実技	総合科学課程 総合セミナー (言語文化) 異文化間コミュニケーション論 言語と文化 文化と社会 情報科学通論	教員養成課程 基礎ゼミ「フランス革命」	プロゼミナールⅠ 「外国を知ること」 「ヨーロッパ世界の社会と経済」	
	ドイツ語Ⅱ	倫理学U 宗教学 歴史学 考古学 歴史学S	社会科学概論U 地理学S 地理学U 心理学						
2	ドイツ語Ⅲ ドイツ語会話Ⅲ	言語学A 言語学S 言語学U 文学A～ 文学S 文学U 芸術学 国際文化論				ドイツ語会話Ⅲ 言語学概論 音声学 ドイツ語会話Ⅳ ドイツ語文化Ⅰ 比較文学	西洋史概論Ⅰ・Ⅱ 西洋文化史 西洋哲学史特講 言語分析論 地誌学Ⅱ (ヨーロッパ) 比較文化論 西洋教育史	プロゼミナールⅡ 「資本主義世界の形成」	
	ドイツ語Ⅳ ドイツ語会話Ⅳ						プロゼミ		
3	ドイツ語Ⅴ ドイツ語Ⅵ					ドイツ語文化Ⅱ ドイツ語概論 ドイツ語文化演習Ⅰ 社会言語学 ドイツ語文化Ⅲ ドイツ語文化演習Ⅱ ドイツ語演習	西洋史演習Ⅰ・Ⅱ 人文地理学 経済史 音楽史 西洋美術史 西洋史 教育史演習 幼児教育史 心理学史	講義 「国際経済法」 「国際法」 「政治史」 「外国法」 「法制史」 演習 「国際社会と法」 「国際法」 「国際化で問われているもの」 「フランス革命」 外書講義 「人権宣言の起源」	講義 「西洋経済史」 「国際経済学」 「会計学史」 「経営学史」 「社会思想史」 演習
4									

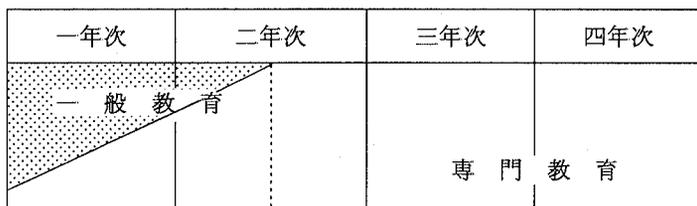
注：教育学部の授業科目は総合科学 教員養成の両課程で同一科目をそれぞれ課程用に変更換えられる科目とそれぞれの課程だけに設けられている科目があるが、従来から教員養成課程に開設されているものは教員養成課程の欄にしてある。またドイツ語文化の専科目の中には一般教育との課程換え科目も含まれているが、あえて重複して載せてある。

各授業科目の取り上げ方はかなりおおざっぱなところがありますが、「ドイツ語を通して、ドイツやドイツ文化を勉強する」ということに焦点を当てて一般教育科目や専門教育科目を見れば、このように全体を眺望することがで

きます。先に見たように、現在学生たちのほとんどが無原則的に一般教育科目を受講していることを考えてみれば、このように、例えばドイツ語を選択し、受講している学生が、ドイツ語以外の授業でも、ドイツ語に関連する科目を一般教育の中で体系的に履修していくことができれば、彼らのドイツ語学習はいっそう効果的になるものと考えられます。

次に上に挙げたような授業科目をどのような段階を踏んで履修していけばよいのか考えてみることにしましょう。香川大学の場合入学から卒業までは、次図のようにいわゆる「Kサビ型」と呼ばれる形式で一般教育および専門教育のカリキュラムの大枠が組み立てられています。

図 1



香川大学の一般教育は原則として一年半の期間（▲まで）で行われるのですが、外国語は農学部を除いて二年次終了まで組んであり、法学部や経済学部は三年次からゼミに入るのので、上の図では一般教育の終了を二年次末にしてあります。この方法の特徴は入学した時点から、専門教育を受けることができ、教養部制にありがちな、専門教育が入学後なかなか受けられず、学生が欲求不満になると言う欠点がありません。反面、学生の一般教育履修の実態を考えてみれば、一般教育が履修を義務づけられたカリキュラムをただ単に消化するだけのものになってしまう可能性も高いと言えるでしょう。このような一般教育の実態を改善し、その内実を豊かにするための一つの方法として、例えば、ドイツ語を受講している学生を例として取り上げれば、彼らのドイツ語学習をもっと有意義にし、一般教育そのものも豊かにするために、表1に取り上げた一般教育・専門教育を、意図的に履修させるようなカリキュラムを組むことが可能ではないかと考えます。

この新しいカリキュラムは、まず一般教育に限って言えば、従来の履修基準の外に新たに設けようというのではなく、「ドイツ文化専攻」という「一般教育における専攻の履修モデル」に基づいて、従来の「外国語科目 8～16単位以上、人文・社会・自然の各系列ごとにそれぞれ 3科目以上12単位以上合計36単位以上、保健体育科目 4単位」の範囲内で履修させようということです。つまり、「ドイツ文化」を一般教育の専攻とした学生は、従来ばらばらに履修しがちだった一般教育の科目を「ひとつの専攻としてのモデル」に従って、あるいはそれを手本として履修していくことにより、その履修する授業のひとつひとつに総体的な意義を求めようということです。もちろん、ここで近視眼的な強制、つまり「専攻」に関係のないものはとらせないというようなことは、一般教育の理念に反しますから、行うべきではありません。さらに学生側から見れば、自分が所属する学部や学科の「専門教育の専攻」とは別に一般教育で専攻を持つことは、直接自分の「専門教育の専攻」と関連づけてもいいし、まったく別個に専攻を選択しても構いません。もっとも後者の方が広がりを持てるものの、専門・一般相互の関連が薄れる危険性は否定できません。ともあれ、それによって、現在学生たちが恣意的に履修している一般教育の授業に一つの主題を持たせることができ、科目間に相互のつながりができ、それぞれの授業がそれ自体で完結するだけでなく、総合的な意味も持たせることもできます。

一般教育での「ドイツ文化」専攻を充実して行くためには、一般教育内部でもまだじゅうぶんとは言えません。というのは冒頭に挙げたような「ドイツ文化に関する総合的な科目」の他に、「ドイツ文化へ導入する科目」が必要です。幸い、香川大学の一般教育の場合、人文・社会・自然の系列にいわゆる講義形式の「通常科目」や自然系の「実験科目」の他に、「総合科目」や小人数による「演習科目」があり、これまでにそれ相応の実績を積んでいます。現在「総合科目」も「演習科目」も一年次の学生を主対象に同一の時間帯に開設されていますが、それを無視して「ドイツ文化専攻」を構想するために、「通常科目」と合わせて一つの改革例を示してみましよう。

図 2

学 年	一年次		二年次	
	前 期	後 期	前 期	後 期
科 目	演習科目	通常科目	総合科目	専門科目
	— 一般教育			

香川大学での一般教育と専門教育は「クサビ型」をとっていますから、図2のように単純化することはできないのですが、これはおおまかな枠組みであり、主眼は「演習科目」と「総合科目」の位置づけの整理だと思っていただくのが最も妥当だと思います。一般教育における「ドイツ文化専攻」の可能性の視点から、この図を見ていくと、まず「ドイツ文化へ導入する科目」を「演習科目」として開設し、それに関連する「通常科目」を履修させ、そして二年次の前期[®]に「ドイツ文化に関する総合的な科目」としての「総合科目」を開設、整備するということになりましょう。このような過程に合わせて外国語科目（ドイツ語と英語）そして専門科目の低学年用に開設されている科目を「専攻」に準拠しながら履修し、高学年用の専門科目を履修し、卒業してゆくこととなります。この間に一般教育の専攻としての「修了論文」が書ければ言うことはありません。表2は表1および図1・2といま述べたような視点とを重ね合わせて作ったものです。この表により、一般教育で「ドイツ文化」を専攻した学生が卒業までにどのような段階を踏んで一般教育および専門教育を総合的に受けて行くかがおおまかにつかめると思います。

表 2

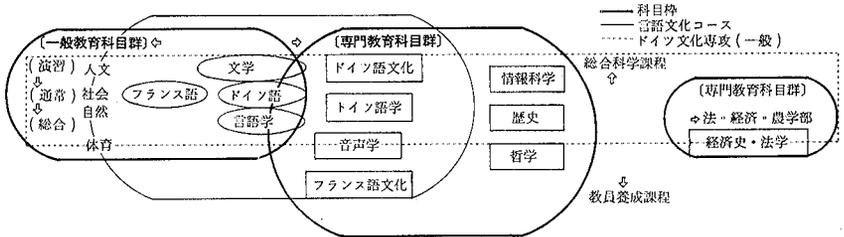
	一 年 時	二 年 次	三 年 次	四 年 次
一 般 教 育	[外国語科目](8~16単位) ドイツ語Ⅰ・Ⅱ 英語Ⅰ・Ⅱ	ドイツ語Ⅲ・Ⅳ 英語Ⅲ・Ⅳ	ドイツ語Ⅴ・Ⅵ [高学年用の科目および 卒論的課題☆]	
	[一般教育科目](36単位) (演習) → (通常) → (総合) <人文> 「文学」(ドイツ文学) --- 「哲学」 「言語学」 「歴史学」(ドイツ史) --- <社会> 「地理学」, 「法学」 --- 「経済学」 --- <自然> 「科学論」, 「環境科学」 --- [保健体育科目] <講義> <実技>		ドイツ語文化 演習★ ドイツ語文化 経済史 国際経済学 国際法 外国法 音楽史 美術史 教育史	ドイツ語文化 演習★ ドイツ語文化 ゼミ「国際社 会と法」 外書講読「人 権宣言の起源」
専 門 教 育	言語と文化★ 文化と社会★ 異文化間コミュニケーション プロゼミ 「外国を知ること」 ----			注 ★は一般 専門読み換え 科目。 ☆ 課題とし ては「文化・ 思想・地域・ 歴史」な ける。

次に専門科目について考えてみると、それは一般教育の延長上に、一般教育で「専攻」の成果に積み上げるといふ形になると考えてよいでしょう。もっとも「授業科目区分の弾力化」が今以上にさらに進んで行けば、もっと色々な可能性も考えられると思います。その場合には、一般教育と専門教育との関わり合いだけでなく、各専門学部同士の「履修や単位認定の弾力化」につながって行くことも予想できます。また、さらにこのような「総合コース」による「ドイツ文化専攻」の履修モデルの導入により、従来の「基礎科目」とはまったく異なる「一般教育と専門教育の連携」が可能になり、大学教育そのものの「総合化」が可能になります。

専門教育についてはさらに別の視点を加えることも可能です。それは1988(昭和63)年度香川大学教育学部の改革で誕生した総合科学課程を構成する言

語文化コースです。この課程全体が「現代社会が要請する狭い専門の枠を超えた総合的・学際的な研究教育をめざす」⁽¹⁾のものであり、言語文化コースもこのような方向付けで運営されています。言語文化コースおよびその中の小専攻である「ドイツ語文化」も大きく見れば、単にそれが専門教育内部だけのことではなくて、コースや課程だけでなく、学部の外や専門教育を超えて一般教育にまで広がらねばならないことは容易に考えられることでしょう。つまり、このコースの授業科目はすでに表1で挙げておきましたが、その一覧表を見るだけで、おぼろげながらも他の欄の科目と結びつきが感じられます。従って、このコースも自らを充実していくために、一般教育との関連を強化してゆくことや課程外や学部外へ踏み出して行くことも必要になってゆくでしょう。図3はそのような科目群を図示したものです。

図3



3. このような構想は、これが香川大学一般教育部の「カリキュラム検討専門委員会」で扱われているとおり、一般教育の改善・改革構想にその出発点があることは言うまでもありませんが、冒頭で述べましたように、ドイツ語教育に従来の議論とは少し色合いの異なる改善方法を提示してくれるものです。ドイツ語の授業は、それが大学の一般教育の一部として行われていることを重視すれば、ドイツ語の授業で自己完結してしまわないで、他の授業科目との関わりを持つとする努力は当然のことだと思います。そしてこのようにドイツ語の授業の一般教育における、そして大学教育における位置づけの試みによって、ドイツ語の授業に今まで述べたような要素を断片的に取り込み、結局のところ内実のない中途半端なものに終わらせてしまう危険からわずかであっても逃れ

ることができるのではないのでしょうか。また大学の「一般教育における専攻」のひとつとして「ドイツ文化専攻」を構想することにはさらに別に根拠があります。それは近代日本におけるドイツ〔語〕圏を多層的にとらえ、理解することは、このような「専攻」を選択する学生が「専門学部」でどのような分野を専攻しようともじゅうぶんに意義があることは否定できません。ドイツ語教育はそのような「ドイツ文化専攻」の核になることを任務のひとつにしなければならぬと筆者は考えます。このような構想や試みはすでにドイツ語教育や一般教育の中では部分的に行われているものですが^①、ここに筆者がまとめた構想に少しでも目新しいものがあるとすれば、それは専門科目まで視野の中に入れていくということでしょうか。筆者のここでの視点はとりあえずドイツ語教育に置いたものですが、他の視点からも構想可能なことは言うまでもありません。また、このような構想の実現は香川大学のような複数の学部から成り、しかも規模が取り立てて大きくないところでかえって可能だと思えます。

注

- (1) 拙稿「一般教育としてのドイツ語教育」香川大学一般教育部「香川大学一般教育研究」第31号 1987年3月 179～194頁
- (2) 拙稿「一般教育としてのドイツ語教育」193頁
- (3) 拙稿「ドイツ語教師にとって『総合』とは——前稿への断片的補足——」香川大学一般教育部「香川大学一般教育研究」第33号 談話室 1988年3月 259～262頁
- (4) 筆者の報告については「第13回ドイツ語教授法ゼミナール報告要旨」（日本独文学会西日本支部編「西日本ドイツ文学」第1号 1989年11月 129～134頁）を参照されたい。
- (5) 筆者がほぼ毎年度初めに一年生に行っているアンケートにもとづく。
- (6) 具体的な授業科目名については、1989（平成元）年度の香川大学各学年部および一般教育部の「修学案内」および「履修の手引」、「講義要項」にもとづいており、年度により異動の可能性がある。
- (7) 香川大学教育学部「履修の手引 総合科学課程」（平成元年度）、「総合科学課程のめざすもの」。

- (8) 「総合科目」の開設および受講基準は、本来二年次の前期でも後期でもよいのだが、ここでは一年半で一応の一般教育の履修に終わる農学部の学生を念頭において、二年次の前期に置いてある。
- (9) その代表的なものとして、次のものを挙げておこう。例えば、国立大学協会教養課程に関する特別委員会『教養課程の改革』1988（昭和63）年11月の「第四章 外国語」には「『一般教育』の目標達成に資するための教養教育としての外国語教育」として、「『なぜ外国語を学ぶか』『言葉とはどういうものであるか』といった知識に欠ける学生に基本的な心構えを教える「外国語A」の開設が改善の提案として出されている。これは同書によれば「総合科目」の方法に準じ、複数の教員がチームを組み、複数の言語を対象とし、大講義クラスと少数ゼミクラスのような組み合わせとし、ゼミクラスでは既習言語のテキストで「購読」を行うが、「講義」と関連のあるテキストを使用し、年間のカリキュラムを作製し、必修単位は2～4単位とし、講義題目としては「世界の言語」、「音声と文字」などようなものとなる科目である。

また、別の観点だが、日本ドイツ学会編『日本におけるドイツ語教育』（1989年、成文堂）は同学会主催のシンポジウムの報告だが、その中でも、小論で述べているような、ドイツ語の授業の外に関連の科目を置く、授業改革の必要性を複数の報告者および発言者が提案している。